

【報 告】

「八潮こども夢大学 in 国士舘大学」における 防災を題材としたプログラムの実施

平石正美，古坂正人（政経学部 政治行政学科）
山崎佳乃，岡嶋大智，白田康之，渡邊眞夢（平石ゼミ）
朝賀夢乃（上村ゼミ）
河村大志（古坂ゼミ）

1. はじめに

2016年11月19日（土）、「八潮こども夢大学 in 国士舘大学」において、埼玉県八潮市の小学生たちが、国士舘大学世田谷キャンパスを訪問し、「防災と市民」をテーマにした模擬授業や防災・救急救助実習等を体験した（表1を参照）。「八潮こども夢大学」事業は、八潮市内の小学高学年生から中学生までの児童・生徒を対象にして、こどもたちの将来の夢の実現に向けて大学での「学び」を体験することで、学習に対する興味・関心を喚起させ、知的好奇心や探

表1 「八潮こども夢大学 in 国士舘大学」の日程表

時 間	内 容	場 所
10：00～10：10	開校式	34号館2階会議室 A
10：10～10：55	模擬授業	34号館2階会議室 A
(10：20～10：35)	父母学級会	34号館 A201 教室
11：00～11：50	防災・救急救助実習体験	34号館1階アトリウム
11：55～12：20	キャンパス見学	中央図書館，大講堂，MCH
12：25～12：30	閉校式	34号館10階スカイラウンジ
12：35～13：20	昼食	34号館10階スカイラウンジ

「八潮こども夢大学 in 国士舘大学」における防災を題材としたプログラムの実施

究心を養うことを目的として、市教育委員会が主催している。平成26年から開始しており、本年で3年目になり、様々な分野の大学で模擬授業や体験実習などのプログラムが提供されており、本学では開催の依頼を受けて今年初めて実施した。

2. 「八潮こども夢大学 in 国士舘大学」での取り組み

「八潮こども夢大学 in 国士舘大学」では、政経学部政治行政学科の平石正美教授が企画・コーディネーターを務め、当日は、入試部学生募集課と平石ゼミと古坂ゼミがその運営を担当した。児童参加者数は20名、保護者参加者数は8名であった。開校式では、副学長の飯田昭夫教授からの挨拶と児童代表からの言葉があり、そのあとで政経学部政治行政学科の古坂正人専任講師が模擬授業を行った（[図1・2](#)を参照）。



図1 開校式の様子



図2 模擬授業の様子

模擬授業では、「防災と市民」をテーマにして、防災カードゲームを使用して災害対応について当事者意識を持って考え選択するためのグループワークを行った（[図3・4](#)を参照）。このゲームは、例えば、問1「大きな地震のため避難所に避難しないといけない。そのときに、家族同然の飼い犬を避難所に連れて行く（YES）？行かない（NO）？」などの質問をし、それに対してこどもたちが多数派の意見を予想して、「YES」か「NO」のどちらかのカードを選び回答するというものである（[図5～9](#)を参照）。そして、多数派の意見になると



図3 グループワークの様子(1)



図4 グループワーク様子(2)

はじめに：防災と市民

- 防災は、自然災害に対応するための公共政策である。
- 市民一人ひとりが防災に対する意識を高めていくこと

↓

市民防災力を向上させることになる

図5 模擬授業スライド(はじめに)

防災カードゲームをやってみよう

- ①災害時に、自分の身を守るために、どのように行動し判断するかを、防災ゲーム(クロスロード)から学ぶ。
- ②自分の問題として、災害対応を考える必要性を学ぶ。
- ③さまざまな意見や価値観があり、それを共有すること。

図6 模擬授業スライド(目的)

問1

- あなたは、市民です。
- 大きな地震のため、避難所に避難しなければならない。
- しかし、家族同然の飼い犬(ゴールデンリトリバー、メス、3歳)がいる。
- 避難所に連れていく(YES)? いかない(NO)?

図7-1 模擬授業スライド(問1)

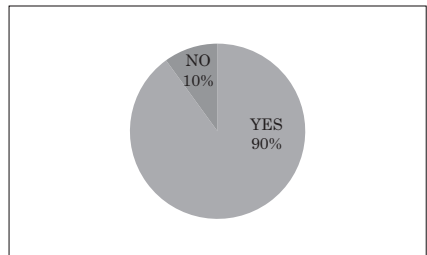


図7-2 問1の回答結果

問2

- あなたは、被災者です。
- 地震で自宅は半壊、家族そろって避難所に避難しなければならない。
- 日頃の蓄えが幸いして、非常持出し袋には、水も食料も三日分ある。
- 一方で、避難所には水も食料も持たない家族が多数いる。その前で非常持出し袋を開ける(YES)? 開けない(NO)?

図8-1 模擬授業スライド(問2)

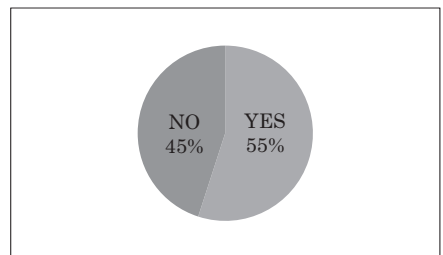


図8-2 問2の回答結果

犬 **問3**

- あなたは、海辺の集落の市民防災組織のリーダーです。
- 10分前の地震で津波警報発令。ラジオは40分前後で第一波が来襲する危険と報じている。みなで声をかけあい、10分あまりで高台への避難を完了した。
- しかし、一家族4人だけ姿が見あたらない。

探しに戻る (YES) ? 戻らない (NO) ?

図 9-1 模擬授業スライド (問3)

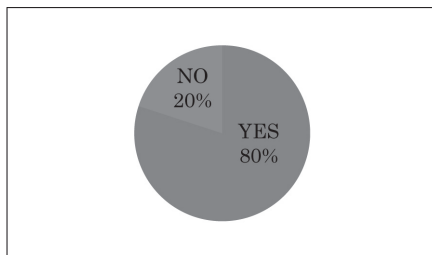


図 9-2 問3の回答結果

1ポイントがもらえ、たとえ少数派でも、一人だけ意見が違う場合は1ポイント（その場合多数派はポイントなし）もらえるというルールである。三問すべて回答した時点で最も多くのポイントをもっている人が「勝ち」となる。

ただし、防災カードゲームの目的は、「勝ち負け」を決めるよりも、ゲームを通して、災害対応について学ぶとともに、意思決定が必要な場面において、多様な意見や価値観があることを理解することである。

問1では、児童の90%がYES（犬を避難所へ連れて行く）を選択した。犬も「自分と同じ大事な命」であるとか「犬も同じ家族だし、自分も犬を飼っているから、見捨てられない」などをその理由として挙げていた。問2「非常持出し袋を開ける (YES)? 開けない (NO)?」は、YESが55%、NOが45%と意見が分かれた。YESを選択した児童は、「自分の命を守るためには、非常食を食べないといけないと思うから。持っていない人に、分けることも可能だと思う」などの理由を挙げていた。NOを選択した児童は、その理由として「他の家族の前で自分たちだけ開けると、他の家族がきずつくから」などを挙げていた。問3「一家族を探しに戻る (YES)? 戻らない (NO)?」では、YES（戻る）が80%、NO（戻らない）が20%であった。「市民防災組織のリーダーとして、市民の命を守る義務があるから」などが、YESを選択した理由として挙げられた。

このようなゲームを通して災害状況を疑似体験することで、防災を自分の問題として考え、また皆で話し合うことで多数派でも少数派でも、異なる意見を尊重する姿勢の大切さを学ぶことができたと思われる（表2を参照）。

表2 模擬授業アンケート結果

問1 模擬授業「防災と市民」を体験して
<p>(1) 楽しかったですか？</p> <p>①楽しかった (100%)</p> <p>②どちらかと言えば楽しかった (0%)</p> <p>③どちらかと言えば楽しくなかった (0%)</p> <p>④楽しくなかった (0%)</p> <p>(2) 有意義でしたか？</p> <p>①有意義であった (95%)</p> <p>②どちらかと言えば有意義であった (5%)</p> <p>③どちらかと言えば有意義でなかった (0%)</p> <p>④有意義でなかった (0%)</p> <p>(3) 多様な意見があると感じましたか？</p> <p>①感じた (95%)</p> <p>②どちらかと言えば感じた (5%)</p> <p>③どちらかと言えば感じなかった (0%)</p> <p>④感じなかった (0%)</p>
問2 模擬授業を受けて感じたこと (自由記入欄・抜粋)
<ul style="list-style-type: none"> ・もし、自分の身の周りで、被害、災害などがあった時に、ここで勉強したことをいかしていきたいです。今日はとても楽しかったです。 ・どの問いも「命」が関わり重要で、どちらが正解とも言えず、すごく難しく迷いました。でも、実際にこのような決断をしなければならぬ時もあるんだと思いました。 ・1人1人がいろんな意見をもっているけれど、一つの道しかえらべないということで自分の正しい道がどちらなのか選ぶ力が必要だと思いました。 ・災害があったときに、自分は自分の意見で動く事が大切だと思っていたが、今回の授業を受けて、一人一人、多様な意見を持っていることを知った。友達意見を聞くことも大切だと感じた。 ・まず場面によって、行動をかえた方がいいと分かりました。ゲームを通して、知識が身につけられたと思いました。命はかけがえのないものだと思ったので、必ず救いたいと思いました。

「八潮こども夢大学 in 国士舘大学」における防災を題材としたプログラムの実施

保護者には、入試部学生募集課の植田尚美課長から「父母学級会」を開催いただき、本学の特徴をお話いただいた（図 10 を参照）。続いて、防災・救急救助総合研究所の月ヶ瀬恭子講師からは、「救急救命士の仕事」というテーマで講演を行っていただき（図 11 を参照）、その後、児童たちに応急手当や搬送法、救急車の展示・見学などの実習を体験してもらった（図 12・13 を参照）。



図 10 父母学級会の様子



図 11 救急救命に関する講義の様子



図 12 救急救助実習の様子



図 13 救急車見学の様子

こうした体験で、こどもたちは防災のスキルを身につけたり防災意識を高めたりすることができたと思われる。月ヶ瀬先生の話に児童たちは食い入るように聞き入っていた。体育学部の学生たちの協力もあり、こどもたちは目を輝かせて防災・救急救助実習に参加している姿が印象的であった。

次いで入試部学生募集課の古川賀一課長補佐と政経学部の学生たちによる世田谷キャンパスツアーが行われ、児童・保護者が大講堂や中央図書館、メイプルセンチュリーホールなどを見学した。閉会式では、飯田先生からのメッセー

ジと児童代表のお礼の言葉があり、その後学食体験などを通して国士館大生の気分を味わっていただいた。最後に、八潮市のこどもたち、保護者・教育委員会の方々、教員・学生がそろって記念写真を撮り、当日のプログラムを終了した（図14・15を参照）。



図14 閉校式の様子



図15 記念写真撮影の様子

3. おわりに

「八潮こども夢大学 in 国士館大学」は、本学で政治行政や防災・救急救助を学び、将来世の中に役立つ・人に役立つ仕事に就くことを目指している学生たちにとっても、真剣で純粋な眼差しで考え学ぶ姿勢が重要であることを再認識させてくれた、大変貴重な機会になったと思われる（表3を参照）。

開校式・閉会式でご挨拶頂きました法学部の飯田先生、防災・救急救助体験実習をご担当頂きました防災・救急救助総合研究所の二宮先生ならびに月ヶ瀬先生、模擬授業・スタッフ支援等についてアドバイスを頂きました政経学部の石見先生、鍵屋さん、父母学級会やキャンパスツアーを実施して頂きました入試部学生募集課の植田さん、古川さん、大森さん、辨天さん、学長室の丹さんには、ご支援ご協力を頂きまして心より感謝申し上げます。

表3 「八潮こども夢大学 in 国土館大学」体験記

〈キャンパス案内〉

山崎佳乃（政経学部 政治行政学科 平石ゼミ4年）

少人数での案内だったため、コミュニケーションをしっかりと取ることができとてもいい時間になりました。小学校と比べて敷地が広いとともに、建物も高さがあるため歩いているだけで楽しそうでした。

メイプルセンチュリーホールではプールが地下にあり1年中泳げ、泳いだ後にジャグジーで冷えた体を温めることもできること、ジムも使用することができることを伝えると驚いていました。保護者の方々にも一般利用できることを伝えました。

また、案内しながらキャンパスのことと共に大学では取りたい授業を取り、各教室で時間ごとにその履修した授業を受けに行くということ話をしたら「受けたいものを選べるんだ」ととても興味を持ってもらうことができました。

〈八潮こども夢大学事業の開校式、閉校式について〉

岡嶋大智（政経学部 政治行政学科 平石ゼミ3年）

本学での「八潮こども夢大学」では防災を中心に取り上げ、体験学習などを行いました。飯田先生からは、「国土館大生は、救命に関わる仕事を進路として多くの人を選んでいて、このような機会でももたちに大学のことを知ってもらえて良かった」と話されていました。子どもたちも八潮市に帰って、本学で学んだことを周りの人に教えてあげてもらいたいと思います。

また、私たちの手伝いに対して大変感謝しているとお言葉を頂きました。私たちにとっても、こどもたちから多くのことを学び、良い経験になったと思います。

開校式・閉校式で飯田先生が話されたように、八潮市の子どもたちが大学に興味を持ち、これからの生活で様々なことを学んで成長し、将来国土館大学の学生として入学されることを楽しみに待っています。私も、八潮市のこどもたちのように、今後の将来に向けて、多くの夢をふくらませ努力していきたいと思っています。今回は、このような体験をさせて頂き、本当にありがとうございました。

〈父母学級会に参加して〉

白田康之（政経学部 政治行政学科 平石ゼミ3年）

今回の「八潮こども夢大学」事業では、大学とはどのようなものがあるのかを小学生やその父母の方々に校内見学などを含めて知ってもらうということで企画されました。防災についての模擬授業や梅ヶ丘校舎の10階にあるスカイラウンジなどで食事をし、終始和やかなムードで進行することができました。

私は「父母学級会」での保護者の方々の引率をさせていただき、話を聞く中で学生募集課の植田さんの説明の場面では、各学部学科の説明やキャンパス説明など国土館大学の特徴について触れ、また、普段の大学生のキャンパスライフをどのように過ごしているのかなど自分たちの経験から話をする機会を頂きました。

こどもたちに大学とはどのようなところなのか、また学業だけでなく心身ともに成長することのできる学び舎であるということが伝えられたのではないかと感じつつ、自分の小学生時代と重ね合わせて、他の地域の小・中学生にもこのような大学見学という機会を多く提供すべきではないかと思いました。

〈こどもたちとのランチタイム〉

渡邊眞夢（政経学部 政治行政学科 平石ゼミ2年）

昼食はスカイラウンジでとりました。私たちは模擬授業やキャンパスツアーを通し子どもたちと仲良くなり楽しいひと時の昼食でした。レンコンが食べられない子やサラダが嫌いな子がおり、私たちが食べるよう言うと文句を言いながらも食べようとしていました。子どもたちの純粋な心に癒されました。また食事前には皆で手を合わせしっかり頂きまずやご馳走様を元氣よく言ってとても礼儀の良い子たちで、私たちもそれを見習いしっかり手を合わせて食事前の挨拶をしました。昼食を終えた子どもたちは各小学校から出た『八潮市子ども夢大学』の宿題をやっておりました。私のがぞいてみると、『お姉さん、お兄さん方が凄く優しく、楽しかった。』また、『模擬授業で防災について学び、家族に問題を出したい。小学校の友達に自慢する。』などと書いておりました。子どもたちの素直な心に感動し、私も自宅で防災について両親と

改めて話し合おうと決意しました。自分が真剣に話す分、子どもたちは耳を傾け一緒に考えられる事を子どもたちから学びました。八潮市の子どもと一緒に学び合えてとても良かったです。ありがとうございました。

〈模擬授業の体験を通して実感したこと〉

朝賀 夢乃（政経学部 政治行政学科 上村ゼミ 3年）

今回、八潮こども夢大学の運営に携わらせていただき、たくさんの学びがありました。

模擬授業では防災についての意識づけを目的としてカードゲームをしながら子供達と学びました。授業で私も体験しましたが、決断するだけでもとても難しかったです。小学生からも悩んでいる様子がかえましたが、ひとりひとりとても一生懸命考えていました。決断理由を尋ねると大学生とは違った視点から物事を考えていることがわかり、成長するにつれて得るものと失うものがあるのだと実感しました。命あるものを尊重する気持ち、リーダーとして率先して動く行動力、みんな平等という考え方、大学生からそういった率直で素直な考え、イメージが出ることはなかなかありませんでした。小学生のお手伝いをする中で私自身の学びの方が多かった気がします。

防災意識、これからの時代を生きる私たちがリーダーシップをとり、行動すべき問題であると思います。それと同時に、危機意識が希薄化する大人の世界には素直な気持ち、基本的なものの見方を子供達との関わりの中でもう一度学ぶべきであると感じました。このようなとても貴重な体験をさせていただき、ありがとうございました。

〈防災・救急救助実習体験について〉

河村 大志（政経学部 政治行政学科 古坂ゼミ 3年）

防災・救急救助総合研究所の先生や体育学部のスポーツ医科学科の学生のみなさんから色々な指導をしてもらい子どもたちに防災についての知識を深めてもらいました。1つ目は怪我をしてしまった人を運ぶ方法です。あまり力がない小学生でも、けがをした人を運べるように、

工夫した運び方を教えてもらいました。子どもたちはまだ体が小さいので手本を見るだけでしたが、今後成長した時に活かしてもらえると思いました。2つ目はビニール袋を使って骨折した腕を吊る方法です。これは身近にあるものを使って一時的に処置する方法で、本当に災害で救急道具がない場合に大変有効な方法だと感じました。3つ目は子どもたちの興味関心が最も高かった救急車の中を見せてもらう体験でした。普段なかなか見ることのない救急車の中を見学できるということで、子どもたちの笑顔が1番みられた気がしました。救急車の運転席にも座ることができ、子どもたちは興味深そうにしていました。こうした経験が、今後災害等で応急手当が必要なときに役に立てば嬉しいことだと感じました。

参考文献

- 諏訪清二（2015）『防災教育の不思議な力—子ども・学校・地域を変える』岩波書店。
- 田村圭子編（2015）『ワークショップでつくる防災戦略—「参画」と「我がこと意識」で「合意形成」—』日経 BP コンサルティング。
- 似田貝香門・吉原直樹編（2015）『震災と市民1：連帯経済とコミュニティ再生』東京大学出版会。
- 松岡京美・村山徹（2016）『災害と行政—防災と減災から』晃洋書房。
- 矢守克也・吉川肇子・網代剛（2005）『防災ゲームで学ぶリスク・コミュニケーション：クロスロードへの招待』ナカニシヤ出版。